

## 遺言状を支えに

# 懐中時計、煙草ケース、バックル、名刺、遺言状

寄贈／土井芳子

橋川春吉さん(36歳)は、仕事で立町へ出かけていた。

被爆後、帰らぬ春吉さんを捜しに行った妻のウメさんらが、焼け跡からこれらの品を掘り出した。

遺骨は今も分からないまま。

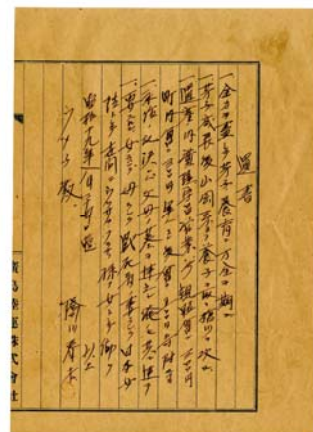
### 寄贈者(春吉さんの娘さん)のお話から

「当時私は3歳。私が大きくなっても、母は辛かったこと、悲しかったことを一切言いませんでしたが、毎月の墓参を欠かすことはありませんでした。父のいない戦後を、万々に備えて父が遺していた遺書を支えに、私も母も誇りだけは忘れずに、誠実に生きました。」



橋川さん一家 1944年(昭和19年)3月頃  
右から芳子さんを抱く父春吉さん、母ウメさん、  
祖母ムラエさん

「私たち家族にとって、この頃が一番幸せでした」



春吉さんの遺書(一部)

「全カヲ尽シテ芳子ノ養育ニ万全ヲ期セ」「女ラシク母ラシク  
戦死者ノ妻ラシク日本女性トシテ世間ニウワサニナラナイ様  
ナ女トシテ働ケ」